

氏名(本籍地)	五関 美里 (東京都)		
学位の種類	博士(学術)		
学位記番号	甲第83号		
学位授与年月日	平成31年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第1項該当		
論文題目	アイヌ衣服およびその文様に関する地域的比較研究 —近世以降の北海道における樹皮衣・木綿衣を中心に—		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学 教授	大谷津 早苗
	(副査)	昭和女子大学 教授	中山 榮子
		昭和女子大学 教授	堀内 正昭
		國學院大學 教授	小川 直之
		昭和女子大学 名誉教授	田畑 久夫

論文要旨

アイヌ衣服はアイヌ文化を代表する存在として以前から注目されてきた。特徴的な文様が施され、素材も木綿、樹皮、獣皮等の種類がある。現在、国内外の博物館等に700点以上、収集保存されているが、多くが製作地・製作年代等の基本情報が不明なままである。

また、アイヌ衣服の研究は今まで服飾的研究が中心で、アイヌ衣服の社会的な機能、文様の意味、信仰性などについては、たとえば魔除け等という漠然とした解釈に留まっていた。

本論文では、アイヌ衣服について、民俗学的・歴史学的観点から地域的比較研究を行い、製作年代、製作地、文様の意味、社会的機能、信仰性等、今まで明確ではなかった基本的性質について、アイヌ衣服の現物資料・絵画資料・文献資料、調査報告書等を駆使し、総合的に解明しようとした。

本研究の目的・方法の新規性は、

- ①主に服飾研究の中で扱われてきたアイヌ衣服とその文様について、民俗学的・歴史学的な観点から、製作年代、製作地、文様の意味、社会的機能、信仰性等、今まで明確ではなかった基本的性質の解明を目指す。
- ②アイヌ衣服の現物資料のみならず、文献資料・絵画資料・調査報告書等をも駆使し、①について総合的研究を行う。
- ③数多くのアイヌ衣服コレクションのうち、保存状態はいいもののこれまで研究上取り上げられることの少なかった早稲田大学會津八一記念博物館所蔵の土佐林コレクション(土佐林義雄が収集、64点)を取り上げる。先行研究をもとに文様構成の地域的比較研究、年代的比較研究を行い、土佐林コレクションの製作地と製作年代について論究する。

以上、3点にある。

本論文は本編（142頁）と資料編（165頁）からなる。本編の論文構成は次のとおりである。

- 序章　はじめに
- 第1章　先行研究の動向およびその問題点
- 第2章　アイヌ社会とアイヌ衣服およびその文様
- 第3章　文献・ユーカラからみるアイヌ衣服及びその文様の比較
- 第4章　近世の絵画からみるアイヌ衣服およびその文様の比較
- 第5章　資料からみたアイヌ衣服における文様の地域的比較
- 終章　結論

序章では、上述の研究目的、問題の所在、研究対象、研究方法を述べ、第1章ではアイヌ衣服と文様に関する研究動向を踏まえ問題点を指摘し、当研究分野における本論文の位置付けを行った。

第2章では、先行研究をもとに、アイヌの歴史的背景、居住地の自然環境や地名、儀礼生活、アイヌ衣服の製作方法等基本事項をまとめた。

本論文は第3章～第5章が中心であり、第3章で文献・ユーカラ、第4章で絵画資料、第5章で土佐林コレクション、比較的資料の情報が判明している旭川市立博物館所蔵、河野コレクション（河野常吉、子広道、孫本道が収集、39点）等のアイヌ衣服資料の現物を取り上げ、分析・検討を行った。

第3章～第5章に見られる研究の成果としては、以下のような点があげられる。

①衣服の社会的機能（第3・4章）

江戸時代の文献資料から、着用する衣服には身分差や貧富の差といった要因があげられること、昭和に記録された伝承叙事詩「ユーカラ」では刺繍入りの樹皮衣は高貴なものが纏う衣装として認識されていることが明らかになった。また、調査報告書からはアイヌ社会における礼服と普段着、装飾品を含めた日常と非日常の着用品の違いなどが読み取れた。

アイヌの風俗が描かれている『蝦夷島奇観』等、江戸時代後期の絵画資料にも、文様入り衣服の着用の違いが見られた。和人との交流が始まり木綿衣がもたらされ普及する前は、樹皮衣が礼服であり、獣皮衣は厳禁で、必ず上から樹皮衣が着用された。木綿衣普及以前から昭和に至るまで、最上の礼服とされたのは「模様入りの樹皮衣」であったといえる。

②土佐林コレクションの製作地（第5章）

土佐林コレクションの衣服について、独自の文様構成による分類とアイヌ語衣服名称の先行研究をもとにして地域ごとに分類することで、衣服ごとの製作地として胆振、平取、静内、浦河、十勝、石狩、三石、様似、上川等の各地域を推定した。

③土佐林コレクションの文様の時代的変遷（第5章）

土佐林コレクションの文様構成を、a（アイウシとモレウのみ）、b（アイウシなし）、c（ハート形・釣り鐘形）に分け、a→b→cという時代的変遷があるという仮説を示すとともに、今まで不明であった製作年代を、昭和4年（1929）～昭和32年（1957）頃と推定した。

④文様構成の地域性（第5章）

土佐林コレクションと河野コレクション等の文様の比較検討から、アイヌ衣服の文様構成はアイヌ居住地区によって違いがあり、旭川は日高に類似していること、旭川の刺繍衣には土佐林コレクションには見られないツタや花など自然をモチーフとした文様が見られることなどが新たに判明した。ツタや花などの自然をモチーフにした文様はアムール川流域の北方少数民族の文様と共通することも示した。

終章では、以上の成果を確認し総括したうえで、文様の意味・信仰性について更に踏み込んだ論を展開した。すなわち、ユーカラにも同様の認識が見られることから、「模様入りの樹皮衣」を着用することは神の姿になるという意味があり、その意味で最も格の高い衣服との認識があったという仮説を提示した。

以上、本論文で示した文様の年代的変遷、地域性などの説をより確かなものにするためには国内外更に多くのアイヌ衣服資料の検討が今後の課題である。更に文様の比較研究において、北方少数民族との類似性も確認できたことから、関係性の解明といった今後の展望が示された。

論文審査結果の要旨

アイヌの衣服にみられる文様に注目し、その地域的な比較研究を民俗学的・歴史学的な観点で踏まえて、極めて実証的に論究した力作である。

本論文は本編（142頁）と資料編（165頁）計307頁の大著である。充実した資料編が、いかに多くの現物資料、文献・絵画資料、調査報告書等に当たって情報収集したかを示している。

本論文の優れた点として主に次の3点があげられる。

まず、1点目は、今までは服飾研究に限られていたアイヌ衣服研究について、民俗学、歴史学まで対象領域を拡げた点である。

具体的にはコレクションとして残る衣服現物に加え、伝承叙事詩の「ユーカラ」、アイヌ風俗画の『蝦夷島奇観』等を対象とし、『蝦夷島奇観』については現存する諸写本の対比も行う等、服飾研究の領域を拡げ、詳細に検討した結果、アイヌ社会においては樹皮衣・獣皮衣・木綿衣等という異素材の衣服が着用されていたが、着用には身分や貧富の差、また普段着・礼服といった日常・非日常の区別があることを提示した。礼服は樹皮衣で獣皮衣は厳禁であった。和人との交流によって木綿衣が普及していくが、木綿衣普及以前も以後も礼服は樹皮衣であり、江戸時代から近現代に至るまで最も格の高い礼服とされたのは「模様入りの樹皮衣」であったことを明らかにした。

更に、アイヌは文様を生きものと捉えていたという従来の説に加え、文様入り樹皮衣は神の服装であり、それを着用することは神と同様の姿になることを意味するという新たな見解を示した。

これは現物資料・ユーカラ・文献資料・絵画資料を総合的に検討した成果で、今後アイヌ衣服資料が民俗学、歴史学の領域でも活用しうる好例となった。

2点目は土佐林コレクションの製作地・製作年代を特定し、文様の変遷モデルを示した点があげられる。

河野コレクションの基礎情報をもとに比較検討の結果、土佐林コレクションの製作年代は昭和4年(1929)～昭和32年(1957)頃と推定された。土佐林コレクションに限らず、アイヌ衣服資料は製作年代が不明なことが多い。本研究の方法を他例に応用することで、製作年代の推定が可能になる可能性があり、本研究は製作年代推定の新たな方法を示した点でも画期的といえる。

更に、土佐林コレクションの文様構成を、a(アイウシとモレウのみ)、b(アイウシなし)、c(ハート形・釣り鐘形)に分け、 $a \rightarrow b \rightarrow c$ という前後関係、即ち時代的変遷があるという仮説を提示したことは特筆すべきことである。この文様の変遷モデルは現段階では仮説であるが新説である。今後は、この分野の学術研究において、申請者の変遷モデルを基本に研究が進められることになるはずである。文様の歴史的展開に関する研究の第一歩としての意義は大きい。文様を学術資料化し、学術研究を前進させた点で高く評価できる。

そして、3点目は地域的比較研究によって地域性を明確にしたことである。

アイヌ衣服の文様は特徴的な形状から以前より注目されていたにもかかわらず、研究業績は非常に少なかった。その理由は、文様資料の収集が困難なこと、衣服の製作地・製作年代の特定が難しいことなどがあげられる。申請者は土佐林コレクションや河野コレクション等のアイヌ衣服の文様を1点1点詳細に分析し、あるいは膨大な調査報告書を丁寧に読解・分析することで上述した2点の克服に努めた。更に、衣服の文様の検討・分析のみならず、パターンが見られた文様の歴史的・社会的背景に関しても大いに眼を配り、それぞれの文様には地域性が確認できることを発見した。

アイヌ衣服に見られる文様に関しては、従来地域的な相違がみられるとは言われてきたが、各コレクションでの知見、報告書などを検討し分析したことにより、地域的な相違がより具体的、客観的に存在することを明確に示した。この点は、独創的な視点であり、学術上も非常に価値が高く、学問的にも新しい知見であると言えよう。そのような意味で、本論文は高く評価することができる。

なお、本論文に先駆けて、日本民具学会に発表した論文(『日本民具研究』157号 22～42頁)は、第32回日本民具学会研究奨励賞を受賞したことを付け加えておく。

本論文に対して審査委員会は規定に基づいて3回の審査会を実施した(3回目は公開)。審査の過程では審査員より、副題やアイヌ風俗画の諸本研究、文様の変遷モデルを仮定する際の事例数、アイヌと和人の民族関係、図表、用語等について説明を求め、質疑応答を繰り返し行った。申請者は質疑応答に対して迅速かつ的確に対応した。審査過程を通して改定が加えられた本論文は、更に学術的意義が大きくなったことも確認できた。

本論文は北海道アイヌの衣服に限定して論究されたが、アイヌを筆頭にシベリアなどの極東

地域に居住する各民族間においても同様の文様が見られる。この点からも、本論文は今後研究対象を更に拡げることが可能な基本的な研究であるといえる。今後更なる研究が大いに期待できる。よって上記を踏まえ、審査員は全員一致して、本論文が博士（学術）を授与されるのにふさわしい内容であることを認めるものである。